

バイリンガル児を育てる母親のコードスイッチング： 文法的側面から

時田朋子

実践女子大学人間社会学部

1. はじめに

グローバル化を背景に国家や民族を超えた個人間の交流がさかんである今日、国際結婚や異民族間結婚をする人々が増加している。これらのカップルは母語が異なることが多いが、各自の母語を子どもに習得させることが少なくない。各自の母語が、親や祖父母との円滑なコミュニケーションの道具やアイデンティティの拠り所となると考えるためである。さらに、バイリンガルの認知的優位性の報告や今日のグローバル化社会もその決定に拍車をかけている。

その場合、各親が自らの母語を用いて子どもに話しかける「1親1言語アプローチ (one parent-one language approach)」(Barron-Hauwaert, 2004) がとられることが多い。ただし、使用場面が制限されるため、社会で使用されない言語を子どもに習得させることは容易ではない。そこで、この言語がもっとも使用されるであろう家庭において、子どもが受ける言語インプットが重要となる。この点について、これまで語用論的側面から複数の研究が行われてきた。Lanza (2004) は、親と異なる言語を発した子どもに対する親の言語的対処を5つのパターンに分類し、それに続く子どもの言語選択を明らかにした。また、Döpke (1992) は、接触量よりも、語彙や文法を子どもに積極的に教えるなどの接触の仕方が、子どもが社会で使用されない言語を使用することに結びつくと報告した。さらに、時田 (2011) は、バンクーバーに居住する日本語母語話者の母親と子どもの会話の分析から、母親が常に子どもに対して日本語を使用し、日本語の文法や語彙、場面に適切な日本語を子どもに習得させている状況を明らかにした。

本稿は、文法的側面から文に着目し、社会で使用されない言語の母語話者である親が、どのような言語インプットを子どもに与えているかを明らかにする。「文内コードスイッチング (intrasentential code-switching)」は、一文の中に二言語が並置される、つまり文の内部で行われる言語の切り替えであり、バイリンガルの発話において頻繁に起こる。実際の発話を用いてその特徴を記述し、インプットの実態を明らかにする。

2. 先行研究

文内コードスイッチングに関する研究は、1970年代、コードスイッチングの意味や機能などの特徴の記述から開始された (Jacobson, 1998)。そのため、言語は文内のどこでも切り替えられるという捉え方や、なんらかの制約を受けて切り替えられるという捉え方など、様々な捉え方がなされた。ただし、制約があるという立場であっても、記述的な示唆にとどまっていた。たとえば、英語とスペイン語の文内コードスイッチングを分析した Pfaff (1979) は、時制やアスペクトに関する制約や、語彙のおよび構造的な制約を文例とともに挙げたのみであった。

普遍的なモデルの構築は、文内コードスイッチングを統語構造から捉えた Poplack (1980) を契機として目指されるようになった。Poplack (1980) は、二言語に共通する文法的なまとまりをコードスイッチングの単位とし、このまとまりの区切り、つまり二言語間の等価点で言語が切り替わることを文内コードスイッチングと捉えた。等価制約は言語の線状性という性質に立脚しており、文に用いられる二言語は対等な関係にある。等価制約が機能せずに言語が切り替わる場合は、「挿入 (insertion) (M'Barek & Sankoff, 1988)」および「借用 (borrowing) (Poplack, Sankoff, & Miller, 1988)」という概念で説明した。

1990年代には、ある言語から生成された文に別の言語の語彙や句が挿入された結果を文内コードスイッチングと捉える、発話プロセスの視点が主流となった。この流れのきっかけは、Joshi (1985) である。Joshi (1985) によると、文内コードスイッチングは、発話プロセスにおいて二言語のシステムが同時に活性化され、二言語間の体系的な相互行為が行われた結果として起こる。二言語は、文を構築する「基盤言語 (matrix language)」と、文に埋め込まれる「埋め込み言語 (embedded language)」に分類される。そのため、文における二言語の統語的機能は対等ではない。なお、限定詞、数量詞、前置詞、時制を示す形態素、助動詞、補文標識、所有格などの「閉じられた文法項目 (closed-class items)」、いわゆる機能語は、そのみで埋め込み言語とはならない。

その後、Azuma (1993) は、Joshi (1985) に、ユニリンガルの発話プロセスを説明した Garrett (1982) のモデルを組み合わせ、「フレーム内容仮説 (Frame-Content Hypothesis)」を提唱した。フレーム内容仮説によると、文は、文の骨組みを作る閉じられた文法項目が語順に従って配置される、つまりフレームの構築を行う第一段階、そして開かれた文法項目 (open-class items) である内容語をフレームに挿入する第二段階を経て生成される。挿入される内容語が文のフレームと別の言語である場合、文内コードスイッチングが起こる。その後、Azuma (1998) は、コードスイッチングの単位はチャンクつまり意味的に自立しているまとまりであると述べている (「自立の原則 (stand-alone principle)」)。

また、Myers-Scotton (1992) も Joshi (1985) の概念を引き継ぎ、「基盤言語フレームモデル (Matrix Language Frame Model) : MLF モデル」を提唱した。MLF モデルによると、埋め込み言語 (Embedded Language : EL) が部分的に基盤言語 (Matrix Language : ML) から成るフレームに埋め込まれる場合、文内コードスイッチングが起こる。MLF モデルは、コードスイッチングの単位を明確にするため、文に使用される形態素を、主題的役割を与えて受ける「内容形

態素 (content morpheme)」と、主題的役割を持たない接辞などの「システム形態素 (system morpheme)」に分類した。そして、EL を、ひとつの形態素から成るタイプ (内容形態素) と、複数の形態素から成る EL の島 (複数の内容形態素や、内容形態素とシステム形態素の組み合わせ) に分類した。その後、下位モデルとして、発話のプロセスからコードスイッチングを論じた「4-M モデル (The 4-M Model)」(Myers-Scotton & Jake, 2001) と、抽象レベルにおける発話プロセスと表層レベルで生じたコードスイッチングを結びつけた「抽象レベルモデル (The Abstract Level Model)」(Myers-Scotton & Jake, 2001) を提唱し、発話プロセスにおいてどのように EL が出現するか、つまりどのように文内コードスイッチングが起こるかを説明した。文は、メッセージが作られてからメンタルレキシコンにおいて語彙概念が構築され、述語項構造、語順の並び替えを経た後、文法的一致が行われて表層に出現する。つまり、語彙概念、述語項構造、語順においてフレームと異なる言語が使用される場合、文内コードスイッチングが起こる。

以上、本節は、文内コードスイッチングの代表的なモデルを概観した。そのため、これら以外にも、多様なモデルが提唱されていることを追記しておく。しかし、研究者たちの一致を得たモデルはまだ存在しない。ただし、文内コードスイッチングがなんらかの規則や制約に基づいて起こるといふ点においては、どのモデルも一致している (ex. 東, 2009)。

3. リサーチクエストと理論的枠組み

本章は、リサーチクエストを示した後、本稿の理論的枠組みを説明する。リサーチクエストは2つある。1つ目は以下である。

英語圏でバイリンガル児を育てる日本人の母親が発する文内コードスイッチングには、どのような特徴があるのか。日本語と英語はどのように一文の中で組み合わせられているのか。

家族間の自然会話において日本人の母親が発した文内コードスイッチングの特徴を明らかにする。日本語と英語は統語構造が大きく異なるが、どのように組み合わせられるのか。日本語と英語から成る文内コードスイッチングを扱った代表的な研究に、カナダのトロントに在住する日系2世の発話を分析した Nishimura (1997) がある。日本語と英語から成る文内コードスイッチングの特徴が記述されているが、被験者は両親が日本語母語話者で、子ども時代は第二次世界大戦中であつたため収容所で生活した経験を持つ 70 歳前後の人々であり、本稿の被験者とは大きく異なる。Azuma (1998) もアメリカ在住の成人2世の発話を分析したが、文内コードスイッチングモデルの構築を研究目的としたため、日本語と英語の文内コードスイッチングは十分に記述されていない。

2つ目のリサーチクエストは以下である。

文内コードスイッチングはなぜ起こるのか。

前節で述べたように、先行研究は、2つの言語がどのように一文において並置されているかを解明するため、様々なモデルを構築してきた。しかし、文内コードスイッチングが起こる理由は明らかにされていない。そこで、本稿はこの理由の解明を目指す。

理論的枠組みは、以下とする。本稿は、発話プロセスモデルを用いて文内コードスイッチングの分析を行う。調査対象が、統語構造が大きく異なる日本語と英語のペアであるためである。なお、先行研究では、発話プロセスモデルとして、フレーム内容仮説 (Azuma, 1993, 1998)、MLF モデル (Myers-Scotton, 1992) および下位モデルの抽象レベルモデルと 4-M モデル (Myers-Scotton, 2001; Myers-Scotton & Jake, 1995, 2001) を取り上げた。これらを、本稿に適切な形式に組み合わせる。

発話プロセスモデルの大きな特徴は、文を構築するフレームへの別の言語の挿入を文内コードスイッチングと捉えることである。フレーム内容仮説によると、文のフレームに別の言語の意味的に自立したまとまりが挿入されることであり、MLF モデルによると、フレームを構築する言語 ML に埋め込み言語 EL が挿入されることである。Azuma (1998) の「意味的な自立性」という概念には曖昧な点が多いため、本稿は形態素や主題的役割を用いて明確に ML と EL を分ける MLF モデルを適用し、文内コードスイッチングを捉える。

また、コードスイッチングの単位として、フレーム内容仮説は品詞を、MLF モデルは形態素を用いる。品詞は ML と EL を大きな視点から捉えることを可能とする一方、形態素は複数の形態素から成る EL の島の構築状態や ML と EL の組み合わせパターンなどの詳細な分析を可能とする。本稿は、EL 全体を記述するための品詞を用いる分析と EL の島を分析するための形態素を用いる分析を組み合わせることで EL を多角的に捉え、文内コードスイッチングの特徴を明らかにする。ただし、EL が複数語から成る EL の島である場合、品詞のみでは捉えきれないため、「句」を用いる。

さらに、発話プロセスについて、フレーム内容仮説は、構築されたフレームに意味的に自立したまとまりが挿入されて文が生成されるというプロセスに立脚し、内容語に EL が使用される場合に文内コードスイッチングが起こると捉える。一方、MLF モデルは、メッセージが作られてからメンタルレキシコンにおいて語彙概念が構築され、述語項構造、語順の並び替えを経て文法的一致が行われて文が表層に出現するというプロセスに立脚し、語彙概念、述語項構造、語順においてフレームと異なる言語が使用される場合に文内コードスイッチングが起こると捉える。本稿は、EL が段階的に出現することに着目して発話プロセスを捉える MLF モデルに立脚して分析する。なお、MLF モデルは、文内コードスイッチングを、表層に二言語が出現する古典的コードスイッチングと、述語項構造と語順においてのみコードスイッチングが起こったため表層には一言語しか出現していない複合コードスイッチングに分類している (Myers-Scotton, 2001)。日本語は語順が比較的自由であるため、述語項構造と語順におけるコードスイッチングを明確に示すことは困難である。そこで、分析対象は、表層に二言語が出現している古典的コードスイッチングのみとする。

4. 調査方法

本章は、調査方法について、被験者、データ、分析方法の点から述べる。

4.1 被験者

調査は、バンクーバー在住の、英語母語話者の親、日本語母語話者の親、子どもから成る4家庭を対象に行った。調査した家族は、「家族A」、「家族B」、「家族C」、「家族D」と呼ぶ。被験者である4人の母親は、日本で生まれ育った日本語母語話者であり、成人後カナダに住み始め10年前後たつ。4人とも英語を習得しており、流暢に使用する。4人の母親の呼称は、家族名と母親「Mother」の頭文字「M」を組み合わせ、「家族Aの母親」は「A-M」、「家族Bの母親」は「B-M」、「家族Cの母親」は「C-M」、「家族Dの母親」は「D-M」とする。

なお、父親は4人とも、カナダの英語圏で生まれ育った英語母語話者である。家族Aの父親は、ほとんど日本語を話さない。家族Bの父親は、母親からほぼ日本語で話しかけられるほど日本語を理解し、父親から母親に対しても時々日本語で話す。家族Cの父親は、日本語を話すことは少ないが、母親は父親に対し時々日本語で話す。家族Dの父親は、ほとんど日本語を話さない。(時田, 2010)。子どもは計6人で、カナダ生まれである。4家族とも1親1言語アプローチが実施され、子どもは誕生以降、英語と日本語に接触してきた。データ収集時、就学児4人は英語を教授言語とする小学校に通い、継承語としての日本語の授業を週に1回2時間日本語教育機関で受講していた。未就学児2人は、家庭で母親と多くの時間を過ごしていた。

4.2 データ

データは、家庭における家族間の自然会話から構築したコーパスである。コーパスとは、「多様な言語情報が付加された、機械可読形式の、書かれたまたは話された、サンプルとなるテキストから成る集合体」(McEnery et al., 2006, p. 4)である。会話は、食事中など数回に渡る計1時間半から2時間、各家庭の母親がICレコーダーに録音した。録音データは書き起こしてから分析に必要な情報を付与し、コーパス化した。

4.3 分析方法

コーパスは、以下の手順で分析した。まず、被験者の発話文を英語または日本語だけが一文に使用されている「一言語のみ」と、英語と日本語が一文に使用されている「二言語」に分け、文内コードスイッチングを抽出した。ただし、ユニリンガルも用いる「確立された借用語」(cf. Poplack, Sankoff, & Miller, 1988; Myers-Scotton, 2006)は、その言語に導入されているためELとは捉えていない。

次に、文内コードスイッチング、つまり「二言語使用」文を、「MLとELの組み合わせ」に従って分けた。具体的には、「ML:日本語・EL:英語」と「ML:英語・EL:日本語」である。

その後、ELの分析を進めた。文内コードスイッチングは、ELがMLに挿入されることにより

起こる。そこで、ELに着目して、文内コードスイッチングが起こる理由を考察することにした。まず、ELをひとつの形態素から成る「EL」と複数の形態素から成る「ELの島」に分けた。一文に複数のELやELの島が含まれる場合は、すべて明記した。それから、EL内部を分析するため、ELには品詞の種類を、ELの島には句の種類を付与した。

5. 結果と分析

本章は、調査の結果と分析を、文内コードスイッチングの頻度と比率、言語の組み合わせパターンの頻度と比率、ELの特徴、の順に述べる。

5.1 文内コードスイッチングの頻度と比率

本節は、母親が発した文内コードスイッチングの総数と全文に占める比率を明らかにする。まず、文内コードスイッチングが行われた文の頻度を算出した。次に、コードスイッチングが行われた文が全文に占める比率を、全体および個人ごとに算出した。そのため、一文に複数のELが挿入されている場合は「1」と数えた。結果は、表1に示すとおりである。

表1 全文に占める文内コードスイッチングの頻度と比率

	頻度	比率
全員	378	9.2%
A-M	70	6.5%
B-M	169	15.7%
C-M	122	9.7%
D-M	17	2.4%

全文に占める文内コードスイッチングの平均比率は9.2%であり、頻繁ではない。この結果は、母親たちが一言語から成る文を多く発する傾向を示す。ただし、4人の母親の間には、多少ばらつきが見られる。家族Dの母親は2.4%である一方、家族Bの母親は15.7%であった。なお、子どもの平均比率は4.1%であり（時田、2010）、母親の方が文内コードスイッチングを行っていた。

5.2 言語の組み合わせパターンの頻度と比率

本節は、文内コードスイッチングにおける言語の組み合わせについて頻度と比率の面から明らかにする。文内コードスイッチングの言語の組み合わせパターンを、「ML：日本語・EL：英語」と「ML：英語・EL：日本語」に分けてそれぞれ頻度を算出し、その後文内コードスイッチングに占めるそれぞれの比率を、全体および個人ごとに算出した。なお、MLの言語を判断するのが困難な文は「不明」として、全体の数値から除いた。結果は、表2に示すとおりである。

表2 言語の組み合わせパターンの頻度と比率

	ML：日本語 EL：英語		ML：英語 EL：日本語	
	頻度	比率	頻度	比率
全員	374	99.2%	3	0.8%
A-M	68	98.6%	1	1.4%
B-M	169	100%	0	0%
C-M	121	99.2%	1	0.8%
D-M	16	94.1%	1	5.9%

母親が発した文内コードスイッチングにおける言語の組み合わせの全体平均比率は、99.2%とほとんどが「ML：日本語・EL：英語」の組み合わせであった。4人の母親の間には、大きな差異は見出されなかった。なお、子どもの場合、「ML：日本語・EL：英語」が90.2%、「ML：英語・EL：日本語」が9.8%であり（時田、2010）、母親と子どもの間には同じ傾向が見出された。

母親たちは4人とも日本語を母語として日本で生まれ育ち、英語は成人してから習得している。しかし、結婚してから調査時までの10年前後は、英語圏での生活に加え、父親が英語母語話者であるため英語を使用する機会が多かった。ただし、母親は子どもに日本語を習得させる目的で、子どもに対しては意識的に日本語を発している（時田、2011）。母親にとって、日本語の文を発することは難しくはない。しかし、日常生活では、常に英語に接触しているため、英語の方が発しやすい語彙や表現があることが考えられる。

それでは、2つの言語がどのように組み合わせられたか、例文をみてみよう。

(1) あ、そうか、Friday だったっけ。(A-M)

(2) ねえ、English school でも、今日、report card あったんじゃないの。(C-M)

2文とも、「ML：日本語・EL：英語」の組み合わせである。A-Mが発した(1)の文では、日本語から成るMLに英語名詞「Friday」がELとして挿入されている。次に、C-Mが発した(2)の文では、日本語から成るMLに英語の名詞句「English school」と「report card」がELとして挿入されている。

5.3 ELの特徴

本節は、ELの特徴を明らかにする。ELは、ひとつの形態素から成るELと、複数の形態素から成るELの島に分類される（Myers-Scotton, 1992）。まず、ELとELの島の頻度と比率をそれぞれ示す。次に、ELとELの島の内部を品詞と句より分析し、その後、意味的特徴を明らかにする。

5.3.1 EL と EL の島の頻度と比率

本節は、EL と EL の島の使用状況を明らかにする。文内コードスイッチングに含まれる EL と EL の島の頻度と比率を全員および個人ごとに算出した。なお、一文に複数の EL と EL の島が出現した場合は、それぞれをひとつの EL または EL の島として数えた。結果は、表3に示すとおりである。

表3 EL と EL の島の頻度と比率

	EL		EL の島	
	頻度	比率	頻度	比率
全員	282	63.2%	164	36.8%
A-M	54	68.4%	25	31.6%
B-M	130	62.2%	79	37.8%
C-M	87	62.1%	53	37.9%
D-M	11	61.1%	7	38.9%

母親が発した文内コードスイッチングにおける EL と EL の島の全体平均比率は、EL が 63.2% で、EL の島が 36.8% であった。EL の方が多数を占め、比率が高い。4人の母親とも、EL が 6 割強、EL の島が 4 割弱であり、同様の傾向が見出された。なお、子どもの場合、EL が 71.6% で、EL の島が 29.4% であり（時田、2010）、母親と子どもの間には同じ傾向が見出された。

この結果は、ひとつの形態素から成る EL の方が EL の島より挿入されやすいことを示している。EL は ML に十分に一致する形式で挿入されること（Myers-Scotton & Jake, 1995）を考慮すれば、複数の形態素から成る EL の島よりもひとつの形態素 EL の方が ML に一致しやすいからと説明することができる。

それでは、EL と EL の島がそれぞれどのように挿入されたか、例文をみてみよう。

(3) そんなに sleepover したいの？ (D-M)

(4) たぶん、too sugary だったのよ、Daddy には。(B-M)

2文とも、「ML：日本語・EL：英語」の組み合わせである。D-Mが発した(3)の文では、日本語から成る文にひとつの形態素から成る英語名詞「sleepover」がELとして挿入されている。次に、B-Mが発した(4)の文では、日本語から成る文に英語「too sugary」がELの島として挿入されている。副詞「too」と形容詞「sugary」が、英語の語順を維持したまま文法的まとまりを構築し、ELの島として日本語のフレームに挿入されている。

5.3.2 EL に用いられた品詞

本節は、ひとつの形態素から成る EL を分析する。母親が発した EL を品詞ごとに分類し、全員および個人ごとに頻度と比率を算出した。結果は、表 4 に示すとおりである。

表 4 EL に用いられた品詞

	名詞	形容詞	動詞	DM	副詞	前置詞	感嘆詞	疑問詞	合計
全員	65.2% (184)	12.8% (36)	11% (31)	8.2% (23)	1.4% (4)	0.7% (2)	0.4% (1)	0.4% (1)	100% (282)
A-M	40	4	4	4	0	1	0	1	54
B-M	81	29	14	3	1	1	1	0	130
C-M	57	2	12	13	3	0	0	0	87
D-M	6	1	1	3	0	0	0	0	11

母親が発した EL に使用した品詞の全体平均比率は、高い順に、名詞 (65.2%)、形容詞 (12.8%)、動詞 (11%)、ディスコースマーカー (8.2%)、副詞 (1.4%)、前置詞 (0.7%)、感嘆詞と疑問詞 (0.4%) であった。高い比率を占めたのは名詞である。この結果は、英語と日本語ペアを分析した Nishimura (1997) と一致する。また、上位の名詞、形容詞、動詞は内容形態素であり、内容形態素が EL になりやすいことを指摘した Myers-Scotton (2006) の見解と一致する。さらに、ディスコースマーカーや疑問詞は内容形態素ではないものの意味的に自立しており、Azuma (1998) が提唱した EL の「自立の原則」が確認された。

なお、子どもの場合、名詞 (73%)、動詞 (12.2%)、ディスコースマーカー (7.9%)、形容詞 (4.3%)、疑問詞 (2.6%) であり (時田, 2010)、母親と子どもの間には同じ傾向が見出された。ただし、副詞、前置詞、感嘆詞は子どもの発話には見られず、母親の方が多様な品詞を使用していた。それでは、EL がどのように挿入されたか、例文をみてみよう。

(5) snowman、誰と作ったの? (C-M)

(6) なんかこう、こう floury なミックスじゃなくて、oily なミックスだから、
こう soggy じゃないかと心配しているだけ。(B-M)

2文とも、「ML: 日本語・EL: 英語」の組み合わせである。C-Mが発した(5)の文には、ひとつの形態素から成る英語名詞「snowman」がELとして挿入されている。次に、B-Mが発した(6)の文には、ひとつの形態素から成る英語形容詞「floury」、「oily」、「soggy」がELとして挿入されている。

5.3.3 EL の島に用いられた句

本節は、複数の形態素から成る EL の島を分析する。母親が発した EL の島を句ごとに分類し、

表5 ELの島に用いられた句の頻度と比率

	名詞句	動詞句	形容詞句	副詞句	前置詞句	その他	合計
全員	84.8% (140)	4.8% (8)	3% (5)	1.8% (3)	0.6% (1)	4.8% (8)	100% (165)
A-M	24	0	0	0	0	1	25
B-M	66	8	5	0	1	0	80
C-M	46	0	0	3	0	4	53
D-M	4	0	0	0	0	3	7

全員および個人ごとに頻度と比率を算出した。結果は、表5に示すとおりである。

母親が発したELの島の全体平均比率は、名詞句が84.8%と非常に高い比率を占めた。それ以外は比率が低く、動詞句(4.8%)、形容詞句(3%)、副詞句(1.8%)、前置詞句(0.6%)であった。これらの句はすべて意味的に自立しており、ELの島においても自立の原則(Azuma, 1998)が機能していた。

なお、子どもが発したELの島の全体平均比率は名詞句が87%と非常に高い比率を占めた。それ以外は、前置詞句が4.3%などと比率が低かった(時田, 2010)。名詞句が高い比率を占める点は母親と子どもの間で共通しているが、母親の方が多様な句をELの島に使用していた。

それでは、ELの島がどのように挿入されたか、例文をみてみよう。

(7) two words にしちゃったんだって、ground と hog と。(A-M)

(8) ああ、でも、でも divide two ができる。(B-M)

2文とも、「ML:日本語・EL:英語」の組み合わせである。A-Mが発した(7)の文には、日本語から成るMLに英語の名詞句「two words」がELの島として挿入されている。なお、このELの島は、内容形態素「two」、「word」と、システム形態素「s」から構成されている。次に、B-Mが発した(8)の文には、日本語から成るMLに英語の動詞句「divide two」が挿入されている。「divide two」は英語の統語構造「動詞+目的語」をとり、動詞句として文法的まとまりを構成する。しかし、「divide two」に「ができる」が続き、名詞句のように扱われている。Myers-Scotton & Jake (1995)によると、ELはMLに十分に一致する形式で挿入される。つまり、英語の動詞句を日本語のMLに適切な形式で挿入するため、名詞句のように使用されたのである。

5.3.4 ELの意味的特徴

本節は、意味的側面から、ELとして挿入されたELの名詞および名詞句を分析する。前節から、ELとELの島は名詞・名詞句としてMLに挿入される傾向が高いことが見出された。それでは、英語で挿入された名詞・名詞句は、どのような意味的特徴を持つのであろうか。

ELとして英語で出現した名詞・名詞句を意味的側面から分析したところ、3つのテーマが見出された。頻度が高い順に、「英語で行う行為」に関する名詞・名詞句（60個）、「学校」に関する名詞・名詞句（53個）、「食べ物」に関する名詞・名詞句（36個）である。具体的には、表6に示すとおりである。

表6 ELの意味的テーマと頻度

EL	テーマ	頻度
英語	英語で行う行為	60
	学校	53
	食べ物	36

それでは、例文をみてみよう。頻度がもっとも高かったのは、「英語で行う行為」に関する名詞・名詞句である。

(9) この人、goalie ? (C-M)

(10) 誰か matching できる人、探してやればいい、って言ったの。(B-M)

C-Mが発した(9)の文には、英語名詞「goalie」がELとして挿入されている。この文脈における「goalie」は、テレビ画面に写っていたアイスホッケーのキーパーを指す。アイスホッケーはカナダの国技であり、カナダ人に身近なスポーツである。家族Cにとってアイスホッケーは英語と結びつく行為であり、そのためC-Mにとっても日本語「キーパー」よりも英語「goalie」の方が言語化しやすかったと考えられる。次に、B-Mが発した(10)の文には、英語名詞「matching」がELの鳥として挿入されている。この発話は子どものスキーマの練習をトピックとする中で発せられ、この文脈における「matching」は、組になれる人という意味で使用された。家族Bにとってこのトピックにおけるスキーは英語と結びつく行為であり、そのためB-Mにとって英語「matching」の方が言語化するのに適切であったのであろう。

次に頻度が高かったのは、「学校」に関する名詞・名詞句である。

(11) だから outside にいたの、今日。(A-M)

(12) でも higher grade じゃないから、結構そんなに気にしていないかな、みんな。(B-M)

A-Mが発した(11)の文には、英語名詞「outside」がELとして挿入されている。この文脈における「outside」は、校舎の外を指す。子どもが英語を教授言語とする学校に通う家族Aにとって学校関連の語句は英語と結びついており、A-Mにとっても英語の方が言語化しやすかったので

あろう。次に、B-Mが発した(12)の文には、英語名詞「higher grade」がELの鳥として挿入されている。「higher grade」は、上の学年を指す。家族Bの子どもも英語を教授言語とする学校に通うため、B-Mも英語の方が言語化しやすかったのであろう。

3つ目は、「食べ物」に関する名詞・名詞句である。

(13) で、自分のお財布に入れて、candyを買っちゃって。(A-M)

(14) なに、その fillet mignon。(D-M)

A-Mが発した(13)の文には、英語名詞「candy」がELとして挿入されている。この文脈における「candy」は、Aの子どもがもらったお小遣いを使って買った食べ物として取り上げられている。この文はカナダにおける行為を扱っているため、「candy」は英語と結びついている。次に、D-Mが発した(14)の文には、英語名詞「fillet mignon」がELの鳥として挿入されている。この文脈における「fillet mignon」は、カナダのレストランのメニューに掲載されていた食べ物として取り上げられ、英語と結びついている。

なお、子どもの場合、英語と日本語のELが見出された。英語で出現したELのテーマは、「食べ物」に関する名詞・名詞句(10個)、「学校」に関する名詞・名詞句(9個)、「英語で行う行為」に関する名詞・名詞句(6個)であり、順位や頻度は異なるものの、意味的なテーマは母親と同様であった。一方、日本語で出現したELのテーマは、「家庭の食事」に関する名詞・名詞句(7個)、「日本語で行う行為」(3個)であった。

以上、母親の発話における、英語で出現したEL名詞・名詞句は、「英語で行う行為」、「学校」、「食べ物」のテーマに分類された。これらのEL名詞・名詞句は、日本語よりも英語との結び付きが強い。そのため、日本語から成るMLであるにも関わらず、英語のELとして出現したのである。

6. 考 察

本稿は、日英バイリンガル児を育てる日本人の母親が発した文内コードスイッチングを文法的側面より分析した。本節は、リサーチクエスチョンに答える形式で、分析結果を考察する。1つ目のリサーチクエスチョンは、以下であった。

英語圏でバイリンガル児を育てる日本人の母親たちが発する文内コードスイッチングは、どのような特徴をもつのか。日本語と英語はどのように一文の中で組み合わせられているのか。

まず、文内コードスイッチングが発話全体に占めた平均比率は9.2%であった。この比率は、被験者が一言語から成る文を発する傾向があることを示している。ただし、家族Dの母親は2.4%である一方、家族Bの母親は15.7%であり、4人の母親の間にはばらつきが見られた。一般的には、

一文に複数の言語を用いることは言語の規範という観点から望ましくないと捉えられることが多く (Baker, 2014)、家族 D の母親はこの規範を遵守しているようである。しかし、家族 B の母親は、頻繁に文内コードスイッチングを行ううえに、父親に対しても 96.2% と非常に高い比率で日本語を ML とする文を発しており、家族間の会話においてほとんど日本語を使用していた (時田、2010)。これより、ML を日本語としつつも英語の EL を積極的に用いて、より良いコミュニケーションを取ろうとしていたことが考えられる。

次に、言語の組み合わせについてである。4 人の文内コードスイッチングは、ほぼ「ML：日本語・EL：英語」の組み合わせであった。つまり、文内コードスイッチングにおける言語の組み合わせパターンは、同等ではなかった。この結果は、6 人の子どもたちも同様であり (時田、2010)、Kwan-Terry (1992) の結果とも一致する。

EL については、ひとつの形態素から成る EL と複数の形態素から成る EL の島に分けて分析した。平均比率は、EL が 6 割で、EL の島が 4 割であることから、EL の方が挿入される傾向が見出された。また、EL は名詞、EL の島は名詞句が高い比率を占めた。ただし、EL の島は複数の形態素から成るものの、「report card」のようにひとつの概念として機能しているものも少なくなかった。そのため、これらの EL の島は、発話プロセスにおいて構築されたというよりは、定型表現として記憶されており (Wray, 2002)、EL と同様に語彙概念を言語化する段階で出現したことが考えられる。さらに、これらの名詞・名詞句は、英語で行う行為、学校、食べ物など、EL 言語である英語と結び付く語句であった。

なお、6 人の子どもも参照したところ (時田、2010)、母親と子どもの間には、文内コードスイッチングに関する大きな差異は見出されなかった。子どもの場合、比率は平均 4.1% と少々低いが、言語の組み合わせのほとんどは「ML：日本語・EL：英語」であった。EL についても、EL の方が EL の島よりも使用比率が高く、名詞および名詞句が多くを占めた。さらに、EL の名詞・名詞句は、EL 言語と関連することと結び付きが強かった。

次に、2 つ目のリサーチクエスションは、以下であった。

文内コードスイッチングはなぜ起こるのか。つまり、EL はなぜ ML に挿入されるのか。

4 人の母親が挿入した EL や EL の島は、名詞・名詞句が多くを占めた。抽象レベルモデルと 4M モデル (Myers-Scotton & Jake, 1995, 2001) によると、メッセージの言語化において、文のフレームとなる ML 言語が決定され、その後に語彙概念が選択される。語彙概念は、通常 ML 言語で選択されるが、EL 言語で選択されることがあり、その場合、文内コードスイッチングが起こる。母親たちが発した文内コードスイッチングは、ほとんど日本語が ML であった。ML が日本語であるということは、通常は語彙概念が日本語で選択される。しかし、発話全体の 1 割程度ではあるが、英語の語彙概念が選択され、文内コードスイッチングが起こった。さらに、EL として出現した英語の語彙概念は、英語と結び付くテーマが多かった。これより、母親たちがこれらの名詞・名詞句となる概念に日本語よりも英語で頻繁に接触していたため英語の方がアクセスしやす

かったこと、またはこれらの概念を英語でのみ記憶していることが考えられる。そのため、MLが日本語であるにも関わらず、ELである英語で言語化したのである。

バイリンガルは2つの言語の能力を持ち、概念の多くを2つの言語で記憶している。しかし、すべての概念が2つの言語で記憶されているとは限らず、仮に記憶されていたとしても1つの言語の方にアクセスしやすい形式であることも少なくない。そのうえ、概念の表現の仕方や意味が2つの言語間において必ずしも一致するとは限らない。このように、2つの言語間において不均衡な状態で保持される概念は、言語化に際してフレームとなるMLと異なる言語つまりEL言語で選択され、その結果、文内コードスイッチングが起こるのである。

7. まとめ

本稿は、英語母語話者の父親とともに日英バイリンガル児を育てる日本人の母親が発する文内コードスイッチングについて、家族間の会話から構築したコーパスを用いて分析した。発話プロセスモデルを用いて分析した結果、文内コードスイッチングが起こる頻度の比率は平均して1割程度であるが、言語の組み合わせはほぼ「ML：日本語・EL：英語」であった。ELについても、ELの方がELの島よりも使用比率が高く、名詞および名詞句が多くを占めた。さらに、ELの名詞・名詞句は、EL言語と結び付きが強かった。また、文内コードスイッチングが起こる理由については、頻繁に接触していないためアクセスしにくい、または記憶がないためアクセスできない語彙概念はMLとして出現することができずにELとして出現するためである、という仮説を導き出した。

今後は、母親の文内コードスイッチングが子どもの言語習得や使用にどのような影響を与えているかを明らかにしていく。また、ELとして出現した語彙概念がどのように記憶されているかを明らかにし、本稿で構築した仮説を検証したい。

参考文献

-
- 東照二 (2009). 『社会言語学入門 (改訂版) —生きた言語のおもしろさに迫る』 研究社.
- 時田朋子 (2010). 『同時バイリンガルの言語使用—日本語と英語を話すカナダの子どもたちの場合』 博士論文、東京外国語大学.
- 時田朋子 (2011). 「国際結婚家庭における言語伝達—バンクーバー在住の日本語母語話者の場合—」 『カナダ教育研究』 第9号、45-51.
- Azuma, S. (1993). The frame-content hypothesis in speech production: Evidence from intrasentential code-switching. *Linguistics*, 31, 1071-1093.
- Azuma, S. (1998). Meaning and form in code-switching. In R. Jakobson (Ed.), *Codeswitching worldwide* (pp. 109-123). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Baker, C. (2014). *A parents' and teachers' guide to bilingualism* (4th ed.). Clevedon: Multilingual Matters.

- Barron-Hauwaert, S. (2004). *Language strategies for bilingual families: The one-parent-one-language approach*. Clevedon, Buffalo: Multilingual Matters.
- Döpke, S. (1992). *One parent, one language: An interactional approach*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Garrett, M. F. (1982). Production of speech: Observations from normal and pathological language use. In A. W. Ellis (Ed.), *Normality and pathology in cognitive functions* (pp. 19-76). New York: Academic Press.
- Jacobson, R. (1998). Conveying a broader message through bilingual discourse: An attempt at contrastive codeswitching research. In R. Jacobson (Ed.), *Codeswitching worldwide* (pp. 51-76). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Joshi, A. (1985). Processing of sentences with intrasentential code switching. In R. David, L. K. Dowty & Z. Arnold (Eds.), *Natural language parsing* (pp. 190-205). New York: Cambridge University Press.
- Kwan-Terry, A. (1992). Code-switching and code-mixing: The case of a child learning English and Chinese simultaneously. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 13, 243-259.
- Lanza, E. (2004). *Language mixing in infant bilingualism*. Oxford: Oxford University Press.
- M'Barek, M. N., & Sankoff, D. (1988). Le discours mixte Arabe/Français: Emprunts ou alternances de langue? *Revue Canadienne de Linguistique*, 33, 143-154.
- McEnery, T., Xiao, R., & Tono, Y. (2006). *Corpus-based language studies: An advanced resource book*. London: Routledge.
- Myers-Scotton, C. (1992). Constructing the frame in intrasentential codeswitching. *Multilingua* 11, 101-127.
- Myers-Scotton, C. (2001). The matrix language frame model: Developments and responses. In R. Jacobson (Ed.), *Codeswitching worldwide II* (pp. 23-58). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Myers-Scotton, C. (2006). *Multiple voices: An introduction to bilingualism*. Malden, Mass: Blackwell.
- Myers-Scotton, C., & Jake, J. L. (1995). Matching lemmas in a bilingual language production model: Evidence from intrasentential codeswitching. *Linguistics*, 33, 981-1024.
- Myers-Scotton, C., & Jake, J. L. (2001). Explaining aspects of code-switching and their implications. In J. L. Nicol (Ed.), *One mind, two languages: Bilingual language processing* (pp. 84-116). Malden, Mass.: Blackwell.
- Nishimura, M. (1997). *Japanese/English code-switching: Syntax and pragmatics*. New York: P. Lang.
- Pfaff, C. W. (1979). Constraints on language mixing: Intrasentential code-switching and borrowing in Spanish/English. *Language*, 55, 291-318.

- Poplack, S. (1980). Sometimes I'll start a sentence in Spanish y termino en Español: Toward a typology of code-switching. *Linguistics*, 18, 581-618.
- Poplack, S., Sankoff, D., & Miller, C. (1988). The social correlates and linguistic processes of lexical borrowing and assimilation. *Linguistics*, 26, 47-104.
- Wray, A. (2002). *Formulaic language and the lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.